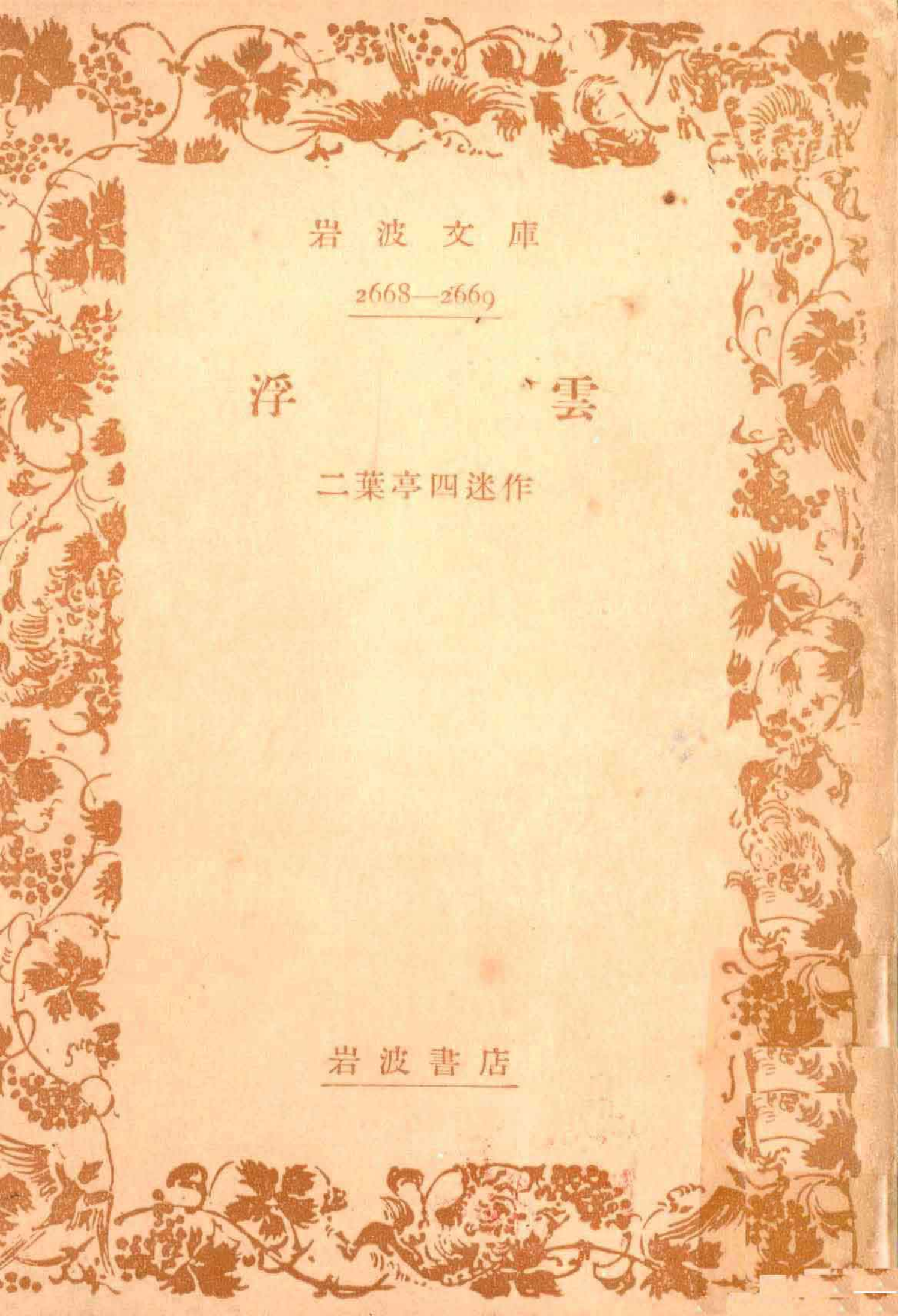




岩波文庫

2668—2669

浮　　雲

二葉亭四迷作

岩波書店

昭和十六年三月二十四日 第一刷發行
昭和三十年七月三十日 第十七刷發行

浮雲

定價八拾圓



作者 二葉亭四迷

發行者 岩波雄郎

印刷者 山田一雄

發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋二ノ三 株式會社

岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします。

精興社印刷・田中製本

岩 波 文 庫

2668—2669

浮

雲

二葉亭四迷作



岩 波 書 店

浮雲

浮雲はしがき

薔薇の花は頭かしらに咲さいて活人は繪となる世の中獨り文章のふ而已のみは黴かびの生うえた陳舊ちんきゆう翰かんの四角張よしかてりたるに
頼返たのひしを附つけかね又は舌足しつそくらずの物言ものいひを學まなびて口に涎よだを流ながすは拙つたし是こゝはどうでも言文一途ごんぶんいつとの事
だと思立おもひたつては矢も楯たてもなく文明ぶんめいの風改良ふうかいりやうの熱一度に寄せ來きるどさくさ紛まれお先眞闇せんじん三寶荒神さんぼうかうじんさ
まと春のや先生せんせいを頼たのみ奉ほうり缺硯けつえんに隴りやうの月の雫しずくを受けて墨摺流すみずりす空そらのきほひ夕立ゆふだちの雨あめの一しきり
さら／＼さつと書流かきせばアラ無情むじやう始末しまつにゆかね浮雲うきぐもめが艶やましき月の面影おもかげを思おもひ懸かなく閉籠とらこめて黒くろ
白しろも分かぬ烏夜玉うやたまのやみらみつちやな小説せうせつが出來でしぞやと我われながら肝かんを潰つぶして此書このしよの卷端まきぐしに序
するものは

明治丁亥初夏

二葉亭四迷

第一篇

第一回 ア、ラ怪しの人の舉動

千早振る神無月も最早跡二日の餘波となつた廿八日の午後三時頃に、神田見附の内より、塗渡る蟻、散る蜘蛛の子とよくぞよく沸出で、來るのは、孰れも顔を氣にし給ふ方々。しかし熱々見て篤と點檢すると、是れにも種々種類のあるもので、まづ髭から書立てれば、口髭、頬髭、頤の鬚、暴に興起した拿破崙髭に、狎の口めいた比斯馬克髭、そのほか矮鷄髭、貉髭、ありやなしやの幻の髭、濃くも淡くもいろ／＼に生分る。髭に續いて差ひのあるのは服飾。白木屋仕込みの黒物づくめには佛蘭西皮の靴の配偶はありうち、之を召す方様の鼻毛は延びて蜻蛉をも釣るべしといふ。是れより降つては、背皺よると枕詞の付く「スコツチ」の背廣にゴリゴリするほどの牛の毛皮靴、そこで踵にお飾を絶さぬ所から泥に尾を曳く龜甲洋袴、いづれも釣しんぼうの苦患を今に脱せぬ貌付、デも持主は得意なもので、髭あり服あり我また笑をか覓めんと濟した顔色で、火をくれた木頭と反身ツてお歸り遊ばす、イヤお羨しいことだ。其後より續いて出てお出でなさるは孰れも胡麻鹽頭、弓と曲げて張の弱い腰に無殘や空辨當を振垂げてヨタ／＼ものでお歸りなさる。さては老朽しても流石はまだ職に堪へるものか、しかし日

本服でも勤められる手輕なお身の上、さりとはまたお氣の毒な。

途上人影の稀れに成つた頃、同じ見附の内より兩人の少年が話しながら出て參つた。一人は年齢二十三の男、顔色は蒼味七分に土氣三分、どうも宜敷ないが、秀た眉に儼然とした眼付で、ズーと押徹つた鼻筋、唯惜哉口元が些と尋常でないばかり。しかし締はよささうゆゑ、繪草紙屋の前に立つても、パツクリ開くなどいふ氣遣ひは有るまいか。兎に角頤が尖つて頬骨が露れ、非道く癩れてゐる故か顔の造作がとげ／＼してゐて、愛嬌氣といつたら微塵もなし。醜くはないが何處ともなくケンがある。背はスラリとしてゐるばかりで左而巳高いといふ程でもないが、瘦肉ゆゑ、半鐘なんとやらといふ人聞の悪い渾名に縁が有りさうで、年數物ながら摺疊皺の存じた霜降「スコツチ」の服を身に纏つて、組紐を盤帶にした帽檐廣な黒羅紗の帽子を載いてゐ、今一人は、前の男より二ツ三ツ兄らしく、中肉中背で色白の丸顔、口元の尋常な所から眼付のパツチリとした所は仲々の好男子ながら、顔立がひねてこせ／＼してゐるので、何となく品格のない男。黒羅紗の半「フロツクコート」に同じ色の「チヨツキ」、洋袴は何か乙な縞羅紗で、リウとした衣裳附、縁の卷上ツた釜底形の黒の帽子を眉深に冠り、左の手を隠袋へ差入れ、右の手で細々とした杖を玩物にしながら、高い男に向ひ、

「しかしネー、若し果して課長が我輩を信用してゐるなら、蓋し已むを得ざるに出でたんだ。何故と言つて見給へ、局員四十有餘名と言やア大層のやうだけれども、皆腰の曲ツた老爺に非ざれば氣の利かない奴ばかりだらう。其内で、かう言やア可笑しい様だけれども、若手でサ、

原書も些^ちたア噛つてゐてサ、而して事務を取らせて捗^{はか}の往く者と言つたら、マア我輩二三人だ。だから若し果して信用してゐるのなら、已を得ないのサ。」

「けれども山口を見給へ、事務を取らせたら彼の男程^{はか}捗の往く者はあるまいけれども、矢張免を喰つたぢやアないか。」

「彼奴はいかん、彼奴は馬鹿だからいかん。」

「何故。」

「何故と言つて、彼奴は馬鹿だ、課長に向つて此間^{こなりだ}のやうな事を言ふ所を見りやア、彌^{いよく}馬鹿だ。」

「あれは全體課長が悪いサ、自分が不條理な事を言付けながら、何にもあんなに頭ごなしにいふこともない。」

「それは課長の方が或は不條理かも知れぬが、しかし苟も長官たる者に向つて抵抗を試みるなどといふなア、馬鹿の骨頂だ。まづ考へて見給へ、山口は何んだ、屬吏ぢやアないか。屬吏ならば、假令^{たと}ひ課長の言付を條理と思つたにしろ思はぬにしろ、ハイ／＼言つて其通り處辨して往きやア、職分は盡きてるぢやアないか。然るに彼奴^{あいつ}のやうに、苟も課長たる者に向つてあんな差圖がましい事を……」

「イヤあれは指圖ぢやアない、注意サ。」

「フム乙う山口を辯護するネ、矢張同病相憐れむのか、アハ／＼／＼。」

高い男は中背の男の顔を尻眼にかけて口を鉗^{つづ}むで仕舞ったので談話^{はなし}がすこし中絶^{とど}れる。錦町へ曲り込んで二ツ目の横町の角まで参つた時、中背の男は不圖立止つて、

「ダガ君の免を喰たのは、弔すべくまた賀すべしだぜ。」

「何故。」

「何故と言つて、君、是れからは朝から晩まで情婦^{いぬ}の側にへばり付てゐる事が出来らアネ。

アハアハく。」

「フ、ン、馬鹿を言給ふな。」

ト高い男は顔に似氣なく微笑を含み、さて失敬の挨拶も手輕るく、別れて獨り小川町の方へ参る。顔の微笑が一かはく消え往くにつれ、足取も次第く^{／＼}に緩かになつて、終には蟲の這ふ様になり、悄然^{しんぱり}と頭をうな垂れて二三町程も参つた頃、不圖立止りて四邊^{あたり}を回顧^{みなほ}し、駭然として二足三足立戻つて、トある横町へ曲り込んで、角から三軒目の格子戸作りの二階家へ這入る。一所に這入つて見よう。

高い男は玄關を通り抜けて縁側へ立出ると、傍^{かたはら}の坐舖^{ざしき}の障子がスラリ開いて、年頃十八九の婦人の首、チョンボリとした摘ッ鼻と、日の丸の紋を染抜いたムツクリとした頬とで、その持主の身分が知れるといふ奴が、ヌツト出る。

「お歸^{かへん}なさいまし。」

トいつて、何故か口舐ずりをする。

「叔母さんは。」

「先程お嬢さまと何處らかへ。」

「さう。」

ト言捨て、高い男は縁側を傳つて参り、突當りの段梯子に登ツて二階へ上る。茲處は六疊の小坐舗、一間の床に三尺の押入れ付、三方は壁で唯南ばかりが障子になつてゐる。床に掛けた軸は隅隅も既に蟲喰んで、床花瓶に投入れた二本三本の蝦夷菊は、うら枯れて枯葉がち。坐舗の一隅を顧みると古びた机が一脚据ゑ付けてあつて、筆、ペン、楊枝などを擱挿しにした筆立一個に、齒磨の函と肩を比べた赤間の硯が一面載せてある。机の側に押立たは二本立の書函、是れには小形の爛缶が載せてある。机の下に差入れたは縁の缺けた火入、是れには摺附木の死體が横ツてゐる。其外坐舗一杯に敷詰めた毛氈、衣紋竹に釣るした袷衣、柱の釘に懸けた手拭、いづれを見ても皆年數物、その證據には手擦れてゐて古色蒼然たり、だが自ら秩然と取旁付てゐる。

高い男は徐かに和服に着替へ、脱棄てた服を疊みかけて見て、舌鼓を撃ちながら其儘押入へへし込んで仕舞ふ。所へトバクサと上ツて來たは例の日の丸の紋を染抜いた首の持主、横巾の廣い筋骨の逞しい、ズングリ、ムツクリとした生理學上の美人で、持ツて來た郵便を高い男の前に差置いて、

「アノー先刻此郵便が。」

「ア、さう、何處から來たんだ。」

ト郵便を手に取つて見て、

「ウー、國からか。」

「アノネ貴君、今日のお嬢さまのお服飾は、ほんとにお目に懸け度やうでしたヨ。まづネ、お下着が格子縞の黄八丈で、お上着はパツとした宜引縞の糸織で、お髪は何時ものイボジリ捲きでしたがネ、お搔頭は此間出雲屋からお取んなすつたこんな」と故意／＼手で形を拵らへて見せ、

「薔薇の花搔頭でネ、それは／＼お美しう御座いましたヨ……私もあんな帶留が一ツ欲しいけれども……」

と些し塞いで

「お嬢さまはお化粧なんぞはしないと仰しやるけれども、今日はなんでも内々で薄化粧なすつたに違ひありませんヨ。だつてなんぼ色がお白ツてあんなに……私も家にゐる時分は是れでもヘタクタ施けたもんでしたガネ、此處へ上ツてからお正月ばかりにして不斷は施けないの、施けてもいゝけれども御新造さまの悪口が厭ですワ、だつて何時かもお客様のいらッしやる前で、鍋のお白粉を施けたところは全然炭團へ霜が降ツたやうで御座います」ツて……餘りぢやア有りませんか、ネー貴君、なんぼ私が不器量だツて餘りぢやアありませんか。」

ト敵手が傍にでもゐるやうに、眞黒になつてまくしかける。高い男は先程より、手紙を把ツて

は讀かけ讀かけてまた下へ措きなどして、さも迷惑な體、此時も唯「フム」と鼻を鳴らした而
 已で更に取合はぬゆゑ、生理學上の美人は左なくとも鯨鰭れさうな兩頬をいど膨脹らして、
 ツンとして二階を降りる。其後姿を目送ツて高い男はホット顔、また手早く手紙を取上げて讀
 下す、その文言に

一筆示しより、さても時こうから日増しにお寒う相成り候へども御無事にお勤め被成候や、
 それのみあんじくらしより、母事も此頃はめつきり年をとり、髪の手も大方は白髪になるに
 つき心まで愚痴に相成候と見え、今年の晩には御地へ参られるとは知りつゝも、何となう待
 遠にて、毎日ひにち指のみ折暮らしより、どうぞく一日も早うお引取下され度念じより、
 さる廿四日は父上の……

と讀みさして覺えずも手紙を取落し、腕を組んでホット溜息。

第二回 風變りな戀の初峯入上

高い男と假に名乗らせた男は本名を内海文三と言ツて静岡縣の者で、父親は舊幕府に仕へて
 俸祿は食だ者で有ツたが、幕府倒れて王政古に復り時津風に靡かぬ民草もない明治の御代に
 成ツてからは、舊里静岡に蟄居して暫らくは儉食の民となり、爲すこともなく昨日と送り今日
 と暮らす内、坐して食へば山も空しの諺に漏れず、次第々々に貯蓄の手薄になる所から足掻き
 出したが、偕木から落ちた猿猴の身といふものは意久地の無い者で、腕は眞陰流に固ツてゐて

も鋤鋤は使へず、口は左様然らばと重く成ッてゐて見れば急にはヘイの音も出されず、といつて天秤を肩へ當るも家名の汚れ外聞が見ツとも宜くないといふので、足を搦木に駆廻ッて辛くして静岡藩の史生に住込み、ヤレ嬉しやと言ツた所が腰辨當の境界、なか／＼浮み上る程には參らぬが、デモ感心には多も無い資本を吝まらずして一子文三に學問を仕込む。まづ朝勃然起る、辨當を背負はせて學校へ出て遣る、歸ッて来る、直ちに傍近の私塾へ通はせると言ふのだから、あけしい間がない。迎も餘所外の小供では續かないが、其處は文三、性質が内端だけに學問には向くと見えて、餘りしぶりもせずして出て參る。尤も途に蜻蛉を追ふ友を見てフト氣まぐれて遊び暮らし、悄然として裏口から立戻ッて来る事も無いではないが、其は邂逅の事で、マ、大方は勉強する。其内に學問の味も出て来る、サア面白くなるから、昨日までは督責されなければ取出さなかつた書物をも今日は我から緝くやうになり、隨ッて學業も進歩するので、人も賞讃せば兩親も喜ばしく、子の生長に其身の老るを忘れて春を送り秋を迎へる内、文三の十四といふ春、待に待た卒業も首尾よく済んだのでヤレ嬉しやといふ間もなく、父親は不圖感染した風邪から餘病を引出し、年比の心勞も手傳て、ドット床に就く。藥餌、呪、加持祈禱と人の善いと言ふ程の事を爲盡して見たが、さて驗も見えず、次第々々に頼み少なに成て、遂に文三の事を言ひ死に果敢なく成て仕舞ふ。生殘た妻子の愁傷は實に比喩を取るに言葉もなくばかり、「嗟矣幾程歎いても仕方がない」トいふ口の下からツイ袖に置くは泪の露、漸くの事で空しき骸を菩提所へ送りて茶毘一片の烟と立上らせて仕舞ふ。さて挿人が没してから家計は一方なら

ぬ困難、藥禮と葬式の雜用とに多^{おほく}もない貯^{たくはへ}蓄をゲツソリ遣ひ減らして、今は残り少^{すく}なになる。デモ母親は男勝りの氣丈者、貧苦にめげない煮焚^{わき}の業の片手間に一枚三厘の襦衣を縫^くけて、身を粉にして揉^か了^せぐに追付く貧乏もないか、如何か斯^かうか湯なり粥^{すう}なりを啜^すて、公債の利の細い烟^{けぶり}を立てゝゐる。文三は父親の存生中より、家計の困難に心附かぬでは無いが、何と云てもまだ幼少の事、何時までも其で居られるやうな心地がされて、親思ひの心から、今に坊^{あひ}が彼して斯^かうしてと、年^{とし}齡には増^ませた事を言ひ出しては兩親に袂^{たもと}を絞^{しぼ}らせた事は有ても、又何處^{たより}ともなく他愛のない所も有て、浪に漂ふ浮艸の、うか／＼として月日を重ねたが、父の死後便のない母親の辛苦心勞を見るに付け聞くに付け、小供心にも心細くもまた悲しく、始めて浮世の鹽が身に浸みて、夢の覺^{さめ}たやうな心地。是れからは給事なりともして、母親の手足^{たそく}にはならずとも責めて我口だけはとおもふ由をも母に告げて相談をしてゐると、捨る神あれば助^{たすく}る神ありで、文三だけは東京に居る叔父の許へ引取られる事になり、泣^{なみ}の泪^{なみだ}で静岡を發足して叔父を便^{たよ}つて出京したのは明治十一年、文三が十五に成た春の事とか。

叔父は園田孫兵衛と言ひて、文三の亡父の爲めには實弟に當る男、慈悲深く、憐^しッぽく、加之も律義眞^{まこと}當の氣質ゆゑ、人の望^うけも宜いが、惜哉^{をしいかな}些と氣が弱すぎる。維新後は兩刀を矢立に替へて、朝夕算盤を弾いては見たが、慣れぬ事とて初の内は損毛ばかり、今日に明日にと喰込で、果は借金^{かみ}の淵に陥まり、如何しよう斯^かうしようと足掻^{あが}き腕^{うで}いてゐる内、不圖した事から浮み上て、當今では些^ちとは資本も出來、地面をも買ひ、小金をも貸付けて、家を東京^{とうきやう}に持ちなが

ら、其身は濱のさる茶店の支配人をしてゐる事なれば、左而已富貴と言ふでもないが、まづ融通のある活計。留守を守る女房のお政は、お摩りからずる／＼の後配、歴とした士族の娘と自分ではいふが……チト考へ物。しかし兎に角、如才のない、世辭のよい、地代から貸金の催促まで家事一切獨で切つて廻る程あつて、萬事に抜目のない婦人。疵瑕と言つては唯大酒飲みで、浮氣で、加之も針を持つ事がキツイ嫌ひといふばかり、さしたる事もないが、人事はよく言ひたがらぬが世の習ひ、「彼婦人は裾張蛇の變生だらう」ト近邊の者は影人形を使ふとか言ふ。夫婦の間に二人の子がある。姉をお勢と言つて、其頃はまだ十二の蕾、弟を勇と言つて、是れもまた袖で鼻汁拭く灣泊盛り（是れは當今は某校に入舎してゐて宅には居らぬので）、といふ家内ゆゑ、叔母一人の機に入ればイザゴザは無いが、さて文三には人の機嫌氣棲を取る杯といふ事が出来ぬ。唯心ばかりは主とも親とも思つて善く事へるが、氣が利かぬと言つては睨付けられる事何時も／＼、其度ごとに親の有難サが身に染み骨に耐へて、袖に露を置くことは有りながら、常に自ら叱つてヂット辛抱、使歩行きをする暇には近邊の私塾へ通學して、暫らく悲しい月日を送つてゐる。ト或る時、某學校で、生徒の召募があると塾での評判取り／＼、聞けば給費だといふ。何も試しだと文三が試験を受けて見た所、幸ひにして及第する、入舎する、ソレ給費が貰へる。昨日までは叔父の家とは言ひながら食客の悲しさには、追使はれたうへ氣兼苦勞而已をしてゐたので、今日は外に掣肘する所もなく、心一杯に勉強の出来る身の上となつたら、ヤ喜んだの喜ばないのとそれは／＼、雀躍までして喜んだが、しかし書生と言つても是も

また一苦界、固より餘所外のおぼツちやま方とは違ひ、親から仕送りなどいふ洒落はないから、無駄遣ひとては一錢もならず、また爲ようともしはらずして、唯一心に、便のない一人の母親の心を安めねばならぬ、世話になつた叔父へも報恩をせねばならぬ、と思ふ心より、寸陰を惜んでの刻苦勉強に學業の進みも著るしく、何時の試験にも一番と言つて二番とは下らぬ程ゆる、得難い書生と教員も感心する。サアさうなると傍が喧ましい。放蕩と懶惰とを経緯の絲にして織上たおぼツちやま方が、不負魂の妬み嫉みからおむづかり遊はすけれども、文三は其等の事には頓着せず、獨りネビツチヨ徐け物と成つて朝夕勉強三昧に歲月を消磨する内、遂に多年螢雪の功が現はれて一片の卒業證書を懷き、再び叔父の家を東道とするやうに成つたからまづ一安心と、其れより手を替へ品を替へ種々にして仕官の口を探すが、さて探すとなると、無いもので、心ならずも小半年ばかり燻ツてゐる。其間始終叔母にいぶされる辛らさ苦しさ、初は叔母も自分ながらけぶさうな貌をして、やはく吹付けてゐたからまづ宜ツたが、次第にいぶし方に念が入ツて來て、果は生松葉に蕃椒をくべるやうに成ツたから、其のけぶいこと此上なし。文三も暫らくは鼻をも潰してゐたれ、竟には餘りのけぶさに堪へ兼ね嘔返る胸を押鎖めかねた事も有ツたが、イヤ／＼是れも自分が不甲斐ないからだと思ひ返してデット辛抱。さういふ所ゆゑ、其後或人の周旋で某省の准判任御用係となつた時は天へも昇る心地がされて、ホット一息吐きは吐いたが、始て出勤した時は異な感じがした。まづ取調物を受取つて我坐になほり、さて落着て居廻りを視同すと、仔細らしく頸を傾けて書物をするもの、蚤取眼になつ

て校合けうがうをするもの、筆を叩へて忙し氣に帳簿を繰るものと種々さまざま有る中に、恰ちやうど文三の眞向まへむかひふに八字の浪を額に寄せ、忙しく眼をしばたゝきながら、間斷たふみもなく算盤を弾いてゐる年配五十前後の老人が、不圖手を止めて珠へ指さしをしながら、「エー六五七の二……でもなしとエー六五」ト天下の安危此一舉に在りと言つた様な、さも心配さうな顔を振揚げて、其癖口をアソゴリ開いて、眼鏡越しにジツト文三の顔を見守め、「ウー八十の二か」ト一越あつ調子高な聲を振立てゝまた一心不亂に弾き出す。餘りの可笑しさに堪へかねて、文三は覺えずも微笑したが、考へて見れば笑ふ我と笑はれる人と餘り懸隔のない身の上。ア、曾て身の油に根氣の心を浸し、眠い眼を睡ねずして得た學力を、斯様こゝろな果敢ない馬鹿氣た事に使ふのかと、思へば悲しく情なく、我になくホツト太息といきを吐いて、暫らくは唯茫然としてつまらぬ者でゐたが、イヤ／＼是れではならぬと心を取直して、其日より事務に取懸る。當座四五日は例の老人の顔を見る毎に嘆息のひ而已してゐたが、其れも向ふ境界に移る習ひとかで、日を経る隨まづに苦にもならなく成る。此月より國許の老母へは月々仕送をすれば母親も悦び、叔父へは月賦で借金濟しをすれば叔母も機嫌を直す。其年の暮に一等進んで本官になり、昨年の暑中には久々にて歸省するなど、いろ／＼喜ばしき事が重なれば、眉の皺も自ら伸び、どうやら壽命も長くなつたやうに思はれる。茲こゝにチト艶なまめいた一條のお癖があるが、之を記しるす前に、チョツピリ孫兵衛の長女お勢の小傳を伺ひませう。

お勢の生立の有様、生來子煩惱の孫兵衛を父に持ち、他人には薄情でも我子には眼の無いお